



2014年、第3回目の通信は渡邊美和子さんに登場していただきます。

キルト作家として、キルト界を牽引してこられた実力者でもあり、またその技法で毎年大作を多数青枢展で発表されて、青枢会の作風の多彩さを印象づけられている渡邊さん。

今回はアトリエまで取材にお邪魔して、現在に至るまでのお話や創作の舞台裏を聞かせていただきました。聞いて初めて分った事が多数あり、やはり取材は大事だなと改めて感じました。

取材中の対談から、創作の秘密に少しでも触れられれば幸いです。

整理が行き届いて随所にキルトが使っている素敵なお宅で迎えていただきました。私（米谷）の乱雑な家とは全く違う（笑）美しい居間でお茶をいただき、2階のアトリエに移動してお話を伺いました。

米谷「今日は有り難うございます。渡邊さんのキルトとの出会いからお話を聞かせていただけますか？」

渡邊「学生時代に一人暮らしをする時、父が何故かミシンを持たせてくれたんです。それがキッカケでパッチワークキルトの本と出会い、キルト教室にも通いました。」

米谷「なるほど、まさかお父様もそれがこんな素晴らしい事になるとは思われなかったでしょうね。今の創作キルトになっていったのは、どういう経緯からでしょう？」

渡邊「マイケルジェームスやジュディワレンといった、コンテンポラリーキルトを知ってからです。ただ伝統的なスタイルに留まらない創作の世界を自分もやってみたい、世界にたった一つのキルトを作りたいと思い立ち、30歳の頃から絵を描くようになりました。」



実際にアトリエで作業されている風に、ポーズしていただきました。



大地のいとなみ 210×168cm

米谷「日本ではまだ前例がない事に取り組まれた訳ですよね。色々ご苦労もあったのではないのでしょうか？」

渡邊「キルト日本展というコンクールがあって、高い評価は頂いたんですけど、当時の審査員だった池田満寿夫氏や浅井慎平氏から、貴方の作品は伝統的な規範のキルトとしての評価では、これ以上は難しい。もっと違う評価がされるべきだし、行くべきだ。という、アドバイスをいただきました。」

米谷「やはり新しいものというのは、なかなか正当な評価というのは難しいんでしょうね。」

渡邊「そんな時、たまたま此木先生の美術館に立ち寄った折、先生がいらして、作品の写真を見ていただいたら、青枢にいらっしやいと誘っていただいたのが青枢会との出会いなんですよ。」

米谷「おお、それは素晴らしい。良いタイミングでの出会いがあったんですね。」

渡邊「青枢展に出品するようになってしばらく経って、キルトの先生が展覧会を観にいらしたところから、横浜開港150周年記念キルトの制作依頼が来たりしたんですよ。」

米谷「あ、あの12mもあるジャンボキルトですね。いつも渡邊さんの作品は大きくて驚くんですが、12mってのは…しかも表裏ともに作品ですよね？パシフィコ横浜の巨大な空間に下げられた。大変な作業だったのではありませんか？」



渡邊「それは大変でした。搬入するだけでも大き過ぎてしかも重いから、お手伝いの人達と畳むだけでも大仕事（笑）」

米谷「そうですね。私なんか 100 号でも大きいと手を焼いていますが…ちょっと恥ずかしいです。展覧会でも大作が多いですが、制作時間はどれくらいとか、よく質問されるのではないですか？」

渡邊「そうなんですけど、そこばかり注目されるようで、初めは嫌だったんですよ（笑）でも最近は青枢会の皆さんも見慣れちゃったせいか、時間の事より、絵としての意見をいただけるようになって居心地がよくなった感じです。」

米谷「なるほど、そう言えば私も最初の頃は手間の事ばかり気にしてたような気がします、すみません（笑）」

あと、勝手な意見なんですけど、やはり絵の会ですから、もっとキルトとしてではない方法論などを言われる事もあると思いますが、そのあたりはいかがでしょう？」

渡邊「意見はいつも参考になるので有難いです。ただ、布を自分で染めちゃえば良いとか上から貼っていくように作れば良いという様なやり方であれば、キルトでなくなっちゃうんですね。あくまでも私の場合は、コンテンポラリーキルトであり、キルトの特性を大切にしたいクオリティーのものである事を大事に制作していきたいと考えています。」

米谷「なるほど、確かに言われてみれば、その通りですね。」

私自身も、絵としてだけ見ていた頃は、そういう意見もしていた気がします。でも同じ方法論に耐えて、その様式の中で表現していく事が、作品の質を高めて行く事になるんだと思います。最後に、今後の抱負を聞かせてもらえますか？」

渡邊「力の限り制作していきたいと思っています。クラシックキルトとコンテンポラリーキルトの中間的な新しいジャンルを提案していけたら良いですね。」

米谷「どうも有り難うございました。また新作を楽しみにしています。」

「遊」



渡邊さんのキルト教室で参考作品として使われているキルト。陰影だけの表情も美しい。



キルト教室を主催されて、また NHK カルチャーやキルト雑誌などでも活躍されているらっしゃる渡邊さん。それと、あの大きな創作キルト作品の数々。そのパワーに改めて驚きました。自身の立ち位置に確信を持って制作されている事も多いに見習いたい事であると感じました。

また、他に類を見ない作家活動をされている渡邊さんが青枢にいらっしゃる事に、少々誇りを感じつつ、帰りの電車に乗った次第です。

最後に「ずっと一緒にやっっていこうね」と言っていたのが、最高のお土産でした。



左・アトリエの机の上
資料やサンプルとして制作されたキルトが置いてありました。

右・アトリエの壁には型紙になる前の下描きなど、キッチリした図面の様なものが貼ってあります。
ただのお絵描きと違い、下準備が大変なのがかえりますね。

